学内発表会要旨

熊本県八代市二見町方言の文末詞について

白石寿文

調査地＝熊本県八代市二見町、農業中心、人口約六千、交通機関バス、

調査日＝昭和三五年四月二十九日→五月五日、

被調査者＝老女A（七十四才）、老女B（六十代）、老女C（六十代）、中女A（四十代）中女B（三十代）、中男（四十）

第一類（単純感声的な文末詞）

(一) ナ行文末詞（資料中最も多い）

(A) 単純形

(a) ナ・ナー

○ソ｜チワスレッシモテ ナ。（老女C→私）つい忘れてしまってね。

○ショバイ｜ショバイデ チガイマストデスバイ ナ。（中女A→私）専門専門でちがうのですね。

○コトシャ ノボリノ ウカ ナ｜。（中女A→中女B）ことしは蟻が多いねえ。

説明は略。

(b) ニャ

○コリャ ワギャエン｜トチャン｜ニャ。老女Bが幼児に向かって、この人は、あんたところの父さんかね、とたずねている。ニャはナ音のなまったもので、二見にあってはかなり多く聞かれるが、待遇品位は中以下である。

(c) ネ

○ユー シモタ ネ。（老女A→小女）やれ〜しまった（ことをした）ね。

(B) 複合形

(a) カ ナ

普通疑問に用いられ、時には強い感嘆をも表わす。待遇品位は中。

○キュー イチ｜ンチ ヨケ｜カナ。（老女A→中男）きょう一日、休みですか。

○ゴメンナッ｜セ。オンナッ｜トカナ。私を案内してくれた老女Aが、老女Bの家の入口で、ごめん下さい、いらっしゃいますかね、と中に呼びかけている。このカナは、かなりの親しみが含まれ、やわらかく相手に問いかけるものである。

(b) ナイ・ナーイ

これはひじょうによくきかれるものの一つで、品位は中よりやゝ下である。ごく親しい間で多く用いられている。

○オル｜ナイ。（少年）僕かね。

○ガッケ イッタナ｜イ。（少年→少年）学校へ行ったよねえ。と相手へ強く同意を求め、学校へ行ったことを強調している。男女年令を問わず全ての人が用いている。

(c) ナン

○ノ｜ム ナン。（中男→小男）飲むかね。品位は低いが、ごく親しい間では疑問としてかなり使うようだ。

(a) モネ・モネー

ものね、もんねという共通語に当たるもので、モンネからモネとなることによって、文末詞として安定してきた安定形といえよう。名詞系文末詞のモンとは違い、それよりも強く相手に訴えてくる。

○ツワシ｜テ ワカラン｜モネ。（老女A→私）昔歌った田植唄をすっかり忘れてしまって、つまりませんものね。自分に言

いきかせるように、私に言ったもので、おばあさんのなげきが含まれ、品位は中だが、親しみがこめられている。

○ムカシノ　タウエニャ　ハズミョッタ｜モネ。（老女C→私）昔の田植はおもしろかったものねえ、と老女Cが、若いころを思い出して語っている。ハズムはおもしろい、しかもとてもにぎやかで、心がはずむようにおもしろいことを言う。このモネは、ごく自然に長呼となる。

○コッカル　トーカ　モネ｜。（老女A→私）道のりが遠いのをなげいている。長呼となると短呼より訴えかけも強く、感情を強く表現する。

(二)ヤ行文末詞

(a)ヤ（品位は低く疑問を表わす）

○ツワシレ　シモ｜タチ　ヤ。（老女A→老女C）忘れてしまったってね。

(b)ヨ（品位は上で、尊敬と親しみがこめられている）

○チャー　ノンデ　イキナ｜レ　ヨ。（老女B→老女C）お茶を飲んでいらっしゃいよ、と家の前を通りかかった老女Cに呼びかけている。ナーレはていねい表現である。

○モッテ　ハッテキナッセ　ヨ。（中男→私）ある農作物を私にくれて、持っておかえりなさいよ、といってくれた。ナッセは、ていねい表現で、ナッセヨで相手にすゝめたり命じたりするのに、ごくやわらかいものいいになっている。

他にヤ行として、さそいかけのヤからきた「イ」がある。例えばイコーイ。（行こうや。）シューイ。（しようや。）の類。

第二類（準感声的な文末詞）

(a)ゾ

○オチャワ　アバカン　ササットル　ゾ。（老女A→中女A）お茶はたくさんさしてありますよ。

(b)ゼ（ゾに似て強調性がある。）

○ダイガ　イヤーゼ。（中女B→老女B）自分がやりたくないものだから、誰がするものか、いやですよ、とことわっている。品位は上とはいえない。

(c)デ

○ウタエバ　トッパ｜ノゴタル　デ。（老女C→私）歌でも歌ったら、いかにもオテンバデ軽薄な女のようなのでね、と歌わない理由を説明。品位は中程度。

(d)ド

推量をあらわすもので待遇品位は中。

○ヘ｜コ　キャ｜トル　ド。（老女A→中女B）お守をしている老女Aの孫が、オシメをしているでしょうね、と念をおしている。

○イキャ｜ヨロコバス　ド｜。（老女A→私）ド｜と、高くなるのがふつうで、いただいて帰ったらきっと家の者が喜ぶでしようよ、とその喜び・感謝と同時に家人の喜びをも推量して言っている。相手へのお礼のことばで最上のものとして用いられる。

(e)ドン

○イイョ｜イタン　ドン。（中女B→私）あんな風に言っていたけどね、と疑いを示している。品位は中以下であまり使わぬようだ。

第三類（原生単純形文末詞）

(a)カ（説明略）

○アタ｜ワ　ドコカラ　キナマシタ　カ。（中女→私）あなたはどこから来られたのですか。

(b)カイ

○オジッチ｜　アスビ　イコー｜カイ。（老女A→小女）背中の孫に、背中から降りて手をひいて遊びに行こうか、とさそいかけている。カと問うより親しみが深く、親近感がよく表われている

(c)キャ

カイが変化したものである。

○ナンチュ｜　イワシタ｜キャ。（老女B→小女）何んておっしやったかね、と女の子

にたずねている。品位は下で、年上の人や目上に向かっては用いない。

第四類（転成文末詞）

今までの本来の文末詞に比べ転成といえる文末詞がこの部類。品詞を一般に指摘できる世界で、転成の事実や、転成の経路が認められる文末詞である。

㈠助詞系文末詞、

助詞からの転成を指摘しうるもの。

(a) ガ

○キュワ　ダイブン　ドンバラノ　フトカー|ガ。（老女B→少女）今日はずいぶんおなかが大きいじゃないね。

(b) ト　略

(c) タ　イ

これはトヨがトイになり、そしてさらにタイになったものと考えられる。

○イマン　ナンドマ　ヒュガブシドモ　オボエトリャ　オラントタイ。（老女C→私）今の若い者たちは田植唄のヒュウガ節なんか知っちゃいないよ。

男女年令を問わずひじようによく話され、断定の気持をよく表わしている。

㈡助動詞系文末詞

(a) ダ　ン

はっきり文末詞といえないかも知れないが、いかにも呼びかけがよく現われて、文末詞化しつゝあることは確かである。

○キョネンノ　ゴガツ　ナワフタン　ダン。（老女A→私）去年の五月に家を移ったのです。「のです」にあたるものであるが、やはり「よ」の気持が加わり、話し手の気持を相手に投げかけている。

㈢動詞系文末詞

「〜という」に当るチュがそれ。

○モッテ　キタッ　チュ。（中年→中女A）中男がその妻に、持ってきたそうだよ、と伝えている。品位は上ではなく、友人親子のような親しい間で使われている。

㈣名詞系文末詞

(a) モ　ン

○コ　ントリ|モツマデ　クローガ　イサッカ|モン。（中女B→老女B）子どもを一人生むまで苦労がなみたいていじゃないものね。子どもを生む事をコヲモツという。品位は中で女性の間で比較的多く使われているようだ。

(b) コテ・コテー　略

㈤代名詞系文末詞

1　アナタ系文末詞

(a) アタ・アター

○ヒャクショワ　ヒマナン|ジャン　アタ。（老女A→私）百姓は暇なしですからねえノあなたノと私に話しかけている。品位は上といえよう。ひじように多くきかれる文末詞で、時に長呼にもなる。

○ンナラ　チョヂョ　アター。（老女C）じゃ、ありがとうね、

2　ワレ系文末詞

(a) ワリャ　略

(b) バ　イ

性、年令の別なくひじようによく使われ、品位も中より上である。ワイ〔wai〕がバイ〔bai〕となったものと思える。

○コ|ーミナイ　オバサン　ウマカッ|バイ。（中女A→老女C）大根漬けを食べてごらんよ、おばさん、おいしいですよ。つけもののようなカリ〳〵音がするのと食べることをカムという。このようにバイにはとても親近感が含まれ、ものやわらかな表現となっている。

㈥文系文末詞

(a) ドーイ・ドーユ

○ハ|ヨ　モッテ　モチアガランバ　ドー|イ。（中女B→私）年をとらぬうちに早目に子どもを生んでしまわないと、どうしてねえ年をとってからでは。生むのがつらいことを強調している。品位は中程度であるが、自分にとって或は、相手にとってあまり気に入らぬ場合や、よくない場合に使われ、嘆き、同情が感じられる。

方言生活をセンテンスの形でとらえてるみといつもセンテンスの分類が問題となる。それを適切に行なうことによって生きたことば、方言生活をよりはっきりととらえることができ、またより深く理解できると思う。文の分類は文末部からやるのが最も妥当だと思い、藤原先生のお考えにならって、文末詞の生成・運用機能に注意を払った。参考書は

『国語学第十一輯』『方言研究年報第一巻』

・『日本語表現文法の研究』

（いずれも藤原先生の論文。）

（本学学生三年）